

賛否など態度決定に至った理由・討論

令和4年3月定例会	
議案番号 議案名	議案第92号 松戸市総合計画の策定について
議員名・会派名等	市民力・立憲民主党(山中啓之・岡本優子・中西香澄)
賛否態度	反対
賛否など態度決定 に至った理由や 討論	<p>※私たち市民力・立憲民主党は、本会議および委員会での討論という本来の発言を最大限に活かすことこそが議員の責務と考えます。非公式の場に、議会で発言してもいない意見を掲載するというやり方は、議員自らが議会における議論を軽視する行為であるとの考えから、以下、本会議・委員会など公の場で討論した内容を掲載いたします。</p> <p>議案第92号「松戸市総合計画の策定について」反対の立場から討論します。</p> <p>当初予定より1年遅れて策定された今回の総合計画ですが、本計画は松戸市の市政運営の基本となるもので、本市の政策の基本的な方向を、総合的、体系的にまとめた市政に関する最上位の計画で、今後8年間の本市の政策・施策をとりまとめたものです。</p> <p>今回反対する大きな理由は3点あります。それは、①人口、②財政、③KPIの3つの観点です。</p> <p>●まず1つ目の、人口についてです。 総合計画4頁記載の通り、日本は平成20年をピークに総人口が継続して減少する社会となっています。日本社会は高度成長期から成熟社会へと転換しつつあり、本市も例外ではありません。</p> <p>先の我が会派の代表質問で申し上げた通り、本市が『共働き子育てNo.1』の評価を頂いた日経のランキングでは国勢調査を用いて0～5歳児の人口が747人、3%増加とされていました。しかし実際のところ、市が普段、政策立案を行う際や各種広報の際に使用しているのは住民基本台帳のよりタイムリーなデータであり、その数字を辿ると逆に642人、2.7%程減少しているという事実を指摘しました。市の通常業務では住民台帳を用いて政策展開しているのに、違う根拠を基に作られた民間ランキングを、その点には一切触れず、平然と宣伝材料として全力で活用しているのが本市のやり方です。</p> <p>今からもう3年ほど前になりますが、新型コロナウイルス感染症が話</p>

題になる前から市は人口50万人カウントダウンを始めました。しかし2019年、平成から令和にかけての1年間の住民基本台帳による人口は49万6千～8千人台をうろつき、令和2年4月末の49万9307人をピークに、以降、微減を続けています。令和4年3月公表の本年2月末の数値は49万6千622人であり、昨年同月と比較して1441人も減少しています。それにもかかわらず本計画11頁には住民基本台帳による人口推移について「東日本大震災の後、一時的に人口減少となったものの、その後は増加を続けている」と記載されています。そこに添付されている折れ線グラフはR2年1月が最新となっていますが、ここで既に右肩に下がり始めている事がはっきり読みとれることから、「増加」という記載は明確に間違っていると言えます。

実際、3月4日の本会議での議案質疑において、総合政策部長より、私の指摘の通り「人口が微減となっております」と、人口が減少している事を認める内容の答弁をされています。

計画34頁には「松戸市の将来人口を展望していくにあたっては、人口動向の現状を的確に把握し、それを前提として、考察を進めていく必要があります」と記載されている一方で、38頁には将来人口については「50万人規模を維持」と展望し、ハイライトで強調された表記がされています。これは先の部長答弁とも整合が取れておらず、矛盾しています。

人口の見込みをなぜこんなに強く指摘するのか。その理由は、人口動向によって本市の税収やインフラ整備等、あらゆる見込み及び計画に大きく影響するものだからです。人口増を見込めば、一般的にはそれだけ税収も増加すると見込むことになり、同時に、必要な公共施設等も多く整備が計画されることとなります。この増加見込みの方向で市は進むようです。

しかし、実際に人口が減っている中では、現実問題として税収の減少が懸念されます。実際には少ない人口で、多く想定した人口分の行政サービスを賄うのは大変です。これら全て残された市民の負担に繋がるからです。

とりわけ34頁～36頁の記載の言葉の端々から、強い不安を感じます。例えば、市の強みと将来の可能性(34頁)については「基本的には転入超過自治体としての位置づけにあるはず」とか、「柏市・流山市への転出が一段落すれば、ファミリー層の転入超過への転換が期待できる」・「更に多くの都内通勤者が居住する可能性を有しているはず」(36頁)など、無責任かつ楽観的な見込みばかりで、市にとって都合の良いケースしか書いていません。重要なのは「柏市・流山市への転出が一段落すれば」ではなく、「どうすれば柏市・流山市への転出が一段落するのか」の具体策を自ら打ち出す事であり、「～～のは

ず」ではなく、「実際にそうなっている」状態に好転させる責任が本市の役割です。まるで他人事のような文言に、計画策定者の当事者意識の欠落を痛感しているところです。

人口微減という本市の現実を直視せず、将来の人口動向について希望に過ぎない甘い見通しをしている本計画は、率直に申し上げて無責任です。冷静な分析よりも掛け声重視の本市の基本的態度が、この人口設定に集約されていると感じます。即刻、見直すべきです。

●次に2点目の財政についてです。

人口の見通しが杜撰ならば財政についても同様に杜撰であることは容易に推測できますが、やはりこちらにも納得いくものではありませんでした。

39 頁に掲載されている財政見通しについては普通会計を中心に記載したもので、近年増加傾向の大型事業については記載されていませんので特別会計が見えにくくなっています。しかも、向こう8年間の数値自体も、先行き不透明な中で正確性に欠けるものと言わざるを得ません。例えば、市長が最重要と位置付ける各種大型事業は基本的に言及されていないのは今後の議論の進捗により大きく事業内容や金額に影響が出ますので、ある意味当然とも思います。しかし一方で、現在、議会でも話し合いが行われている新拠点ゾーンを巡る市役所本庁舎の建て替えについては売却費35億円程が既に見込まれています。売却方針も決定していないのに収入に見込むのは理解に苦しみます。一方で、新松戸駅東側土地区画整理事業と一連とされる新松戸駅常磐線快速停車に関する232億円については見込まれていないとの事です。市へ寄与するであろう収入は都合よく見込む一方で、それ以上の大きな出費となりそうな事業費については盛り込まないのでは、虫がよすぎます。これでは到底、正確な財政見通しとは言えません。通常、財政というのは手堅く見積もるものです。即刻、公平な観点で厳しく算出し直すべきです。

●最後に3点目はKPIの設定についてです。

総合戦略には、施策ごとの達成度の検証を可能にするため、明確な目標と重要業績成果指標(Key Performance Indicator:通称KPI)を設定する事になっています。

先の総務財務常任委員会では、本来別のものであるべき総合計画が総合戦略と一体となって策定されている事に批判的な意見も聞かれましたが、更に認め難いのはその内容です。

昨年6月に会派意見として文書で指摘させて頂いた項目も多々あります。例えば、近年注目されること多い図書館の人口一人当たり蔵書冊数(52 頁)は 2.4 冊と低すぎます。県内 37 市のうち人口3位の本市は、県内上位を目指すべきところ、県平均を大きく下回る目標

とは情けない限りです。また、財政力指数(85 頁)は全国上位水準 2 割を維持としている一方で、健全化判断比率の 4 指標を下回るという、夕張市以外は基本的にひっかかることの無い当然のラインを目標値と設定している事には呆れます。また、三世帯同居等住宅支援制度の利用件数(49 頁)の設定については、対象者が限られてしまい、親や子供がいらっやらない多様な生活スタイルが存在する中で、自己努力だけではどうにもできない環境の方に対してあまりにも不平等な設定です。しかも目標数も 198 件→170 件と減っています。一体何を目標したいのでしょうか。ビジョンが見えません。その他、新松戸駅東側土地区画整理事業の整備率(66 頁)については、現在の 0.03%→100%完了へという設定です。現在、高すぎる減歩率や採算が取れない可能性のある高層マンション計画等を含む現計画に対して、ご納得されていない地権者がおり、その総面積は約 4 割にも上ると言われている中で、時には事業期間の延長の可能性もあると示唆する先の委員会における答弁とは裏腹に、住民の理解を得るといふ民主的な姿勢よりも、先に期限を設定することでお尻だけ決めてしまって、その中で何が何でも事業を遂行するという強引な姿勢だけが浮き彫りになっています。

同様の事例は枚挙にいとまがありませんが、このようにKPIに関しては①目標数値が低いものと、②KPIの設定項目が施策達成に寄与していないもの、③KPIの設定項目自体が不適切であるもの、に問題が大別されるようです。以上の事から、多くのKPI項目について賛同できない事からも、反対理由といたします。

総じて、本総合計画は国全体の人口減少という自然な流れに大きく逆らうだけに留まらず、本市の人口微減に見て取れる人口減少の事実を直視せず、現状の人口維持でさえも厳しい中、50 万という到底現実的とは思えぬ増加傾向を目指している点で、至極、楽観的なものと言わざるを得ません。現状分析からして甘すぎる事に加え、続く財政見通し及びKPI設定についても十分な熟慮の上に設定されたとは思えぬものが多く散見され、無理な目標に無理な対策を重ねている状態です。市にとって好都合な内容の記載に溢れ、リスクから目を逸らし、また市民の目を逸らさせ、もはやバイブルとは言えぬどころか、本市の方針を指し示すコンパスとは思えぬ本計画には、反対を表明するものであります。